

Title	アメリカにおける女性労働：19世紀末から20世紀初頭
Sub Title	American women at work 1890-1920
Author	岡田, 泰男 黒川, 春子
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1992
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.84, No.4 (1992. 1) ,p.1040(298)- 1060(318)
JaLC DOI	10.14991/001.19920101-0298
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19920101-0298

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



アメリカにおける女性労働

—19世紀末から20世紀初頭—

岡田 泰 男
黒川 春 子

はじめに

1907年、アメリカの国勢調査局が『働く女性に関する統計』という特別報告書を⁽¹⁾発表した。これは、1900年の国勢調査における未公開の調査原票にもとづいて、女性労働者の実態を明らかにしようとするものであった。女性労働者に関する統計は1870年から集められていたが、16歳以上の女性有業人口が480万に達し、女性人口（16才以上）の20%を越えたことが、この報告書を作成する動機になったものと思われる。その序文において、「女性にとって、職業につくことは、決して特別のことではないにせよ、一般的とはいえず、とくに豊かな階層にとっては例外的である。また、女性にとっては、仕事を持つことは、多分、恒久的なものではなく一時的である場合が多いであろう」と述べられているが、ともあれ、女性労働の重要性が、無視できぬものになってきたことは明らかである。以下において、この資料およびその前後の統計を利用し、19世紀末から20世紀にかけての、アメリカ女性労働史の一面を示そうと思う。

女性史についての研究が、いちじるしい進展

をみたのは近年のことであるが、アメリカの女性労働の、いわば通史的展開については一応、次のような見取り図が描けるであろう。19世紀のアメリカにおいては、「女性は家庭にとどまるべきだ」とするヴィクトリア朝的な価値観から、労働市場への参加は制限されていた。とはいえ工業化の進展につれて、男性の世界へ入ってゆく者が増加する。技術の進歩、とくに熟練を必要としないような生産技術の進歩は、女性の就業を容易にした。有名なローウェルの綿工場は、若い女性の雇用をあてにして建設された。もちろん、この背景には、結婚前の若い娘たちの行動の自由を許すような家族の存在という、社会的要因があるし、農業の変革も存在した。ともあれ、農場や家庭から解放された女性たちは、まず繊維産業へ入っていった。

次に女性が進出していったのは、衣服、靴、タバコ、食品等の消費財製造業である。衣服の場合、ミシンの発明と普及が、これに従事する女性労働者数を増大させたが、家庭内での内職という形態も多かった。靴の場合には製靴機械の発明により、男性熟練職人による靴作りが、女性労働者による工場労働にとって替られていった。タバコは1880年代における機械化導入が、

注（1） Bureau of the Census, *Statistics of Women at Work, Based on Unpublished Information derived from the Schedules of the Twelfth Census: 1900* (Washington, D. C., 1907)

（2） *Women at Work*, p.9.

女性労働者の職場を拡大したが、南部の産業であるため、白人は完成工程、黒人は原料加工工程という風な差別が存在した。食品は、女性の職場を増やしたと同時に、その生活を変えたという意味でも重要であった。保存のきく缶詰や工場製の食パンは、家庭における女性の仕事を軽減し、彼女たちが外へ出てゆく機会を増大させたのである。以上は消費財製造業であるが、これに比して生産財製造業、重工業への女性の進出は遅れ、20世紀、それも2度の世界大戦と、その後のオートメーションの進歩などにより、男性のみの職場ではなくなっていった。

ところで、アメリカにおける教育、とくに高等教育は、女性がリードする時代が長く続いた。というのも、前記のヴィクトリア朝の観念に加え、男性に比べ低い賃金しか与えられなかったもので、余裕のある家庭の娘たちは職場よりは学校を選んだからである。こうした教育の蓄積が、やがて女性の仕事の領域を拡大してゆく。19世紀前半、教育を受けた女性がつく職業は教師や看護婦であった。南北戦争の頃までには、小学校の教師の大半は女性であったといわれる。その後、企業規模の拡大によって、いわゆるオフィスでの仕事が増加し、ここに「読み書き」のできる女性が求められるようになった。秘書や速記者、そしてタイプライターの発明によりタイピスト、さらには電話交換手と、今日のコンピュータプログラマーにつながる事務系職業への道が開けていった。もちろん、こうした職業に女性が雇われたのは、もともと女性の賃金が低かったからであるし、タイピストや交換手が「女性の仕事」とみなされることにより、男

女賃金格差が固定化し、女性の昇進が妨げられるという結果も生じた。とはいえ、「女性は家庭にとどまるべきだ」という観念は、まさに古くさいものになっていった。⁽³⁾

さて、ここでとりあげる『働く女性に関する統計』は、家庭の外で女性が働くことが、「特別のことではない」ようになってきた時期のものであり、上に述べたような女性の働く場の拡大が、一般に認識されるに至った頃の状態を示している。ただし、先のまとめは綿工場に始まりオフィスでの仕事にいたる点で、女性とはいえ、白人女性それもアメリカ生れの白人女性を中心としている。そうした表の部分の陰にかくれた移民や黒人の女性の状態はどうであったか。幸いなことに『働く女性』の統計は、人種や出生地により分類されているので、女性労働者内部の相違を知ることができる。そこで本稿では、白人女性中心の見取り図に修正を加えるため、黒人女性にもスポットをあてたいと思う。

I 1900年の全般的状況

まず、『働く女性』における女性労働者の分類を、原文のまま、あげておこう。

- ① Native white—both parents native
- ② Native white—one or both parents foreign born
- ③ Foreign born white
- ④ Negro
- ⑤ Indian and Mongolian

上記のうち、①はアメリカ生れの白人で、両親もアメリカ生れ、②はアメリカ生れの白人だ

注(3) 女性史に関する業績はあまりに多いので、とりあえず最近のサーヴェイ的論文と概説書を二三あげておく。Linda K. Kerber, "Separate Spheres, Female Worlds, Women's Place: The Rhetoric of Women's History," *Journal of American History* 75 (June 1988), 9-39; Alice Kessler-Harris, *Out to Work: A History of Wage-Earning Women in the United States* (New York, 1982); Carol Groneman and Mary Beth Norton, eds. *To Toil the Livelong Day: America's Women at Work, 1780-1980* (Ithaca, 1987); W. Elliot Brownlee and Mary M. Brownlee, eds. *Women in the American Economy: A Documentary History, 1675-1929* (New Haven, 1976). 黒人女性については、Jacqueline Jones, *Labor of Love, Labor of Sorrow: Black Women, Work, and the Family from Slavery to the Present* (New York, 1985).

が、父母のいずれか、もしくは両親が外国生まれ、③は白人の移民、④は黒人、⑤はインディアンとアジア系移民である。以下において、白人とは①、②、③、アメリカ生まれの白人とは①、②、移民の子は②、移民は③をさす。付表では①を白人A、②を白人B、③を移民、④を黒人と記す。なお、⑤のグループは実数が少なく、とりあえず本稿では検討の対象に含めないが、付表では「その他」と記しておく。

最初に女性労働者の増加の状況について見よう。表1に示すように、16歳以上の女性の有業率は、1880年の16%から1900年には20%強に増加している。実数では約235万人から483万人へと2倍以上の増加である。男性の場合、実数はともかく、有業率はほぼ90%で変化はない。これを人種・出生地別に見るとどうか。表2は、1890年との比較であるが、実数で増大しているのは白人A、Bと黒人のグループであり、有業率で見ると、アメリカ生まれの両親を持つ白人と、黒人の労働市場への参加の増大が目につく。表の1と2では、15歳以上と16歳以上という相違があるが、ともあれ、アメリカ生まれの白人と黒人とが、働く女性の増加に大きく貢献したことが分る。ただし、1900年の有業率を見ると、白人と黒人との差が大きいし、同じアメリカ生まれの白人でも、移民の子の方が働いている率は、はるかに高い。そこで、人種・出生地による差が何故存在するか、また、より具体的にどのような形で存在するかが問題となる。

これには、さまざまな要因、要素がからまってくるが、『働く女性』においても、人種・出生地のほか、次のような観点から分析がなされている。すなわち、年齢、結婚に関する状態、都市と農村、職業といったものである。もちろんアメリカのことであるから、北部と南部といった地域差も大きく関係する。

年齢(表3)について見ると、何よりも男性と女性との差が大きい。女性労働者全体を見れば、

その44%が25歳未満であり、35歳未満とすれば、68%が含まれてしまう。男性の場合、25歳未満で25%、35歳未満としても51%であって、大きく異なる。これは女性の本来の場を家庭に求める伝統的思考により、結婚すると職業から離れてしまう者が多かったことを予想させる。ただし、これは人種により異なる。表4は、各グループにつき、例えば16~20歳の女性の何パーセントが働いているか、を示している。白人で、移民の子の場合、25歳未満では40%近く、移民は42~57%が働いているが、それを過ぎると両者とも20%か、それ以下になってしまう。これに対して黒人の場合には、年齢を重ねても働き続けている者が多いことが特徴的である。55歳を過ぎても、まだ40%以上が働いている点は、白人が10%程度であるのと比べて、その差が著しい。

上記の点は、結婚と仕事との関係を見ると更にはっきりする(表5)。結婚に関し『働く女性』では、未婚、既婚、死別、離婚の四つの区分を用いている。全体としての有業率を見ると、夫と離婚した女性が最も高く、独身女性、死別者、既婚者と続く。ここで、未婚者と既婚者という二つのグループに注目すると、独身時代にはアメリカ生まれの白人もかなり働いており、移民は70%と高い率を示している。しかし、いったん結婚してしまうと、まさに主婦の場は家庭ということであろうか、白人では3%くらいしか働いていない。これに比して黒人の場合、未婚者より、かなり率は低くなるものの26%が働いている。「働く主婦」というカテゴリーを設けるとすれば、当時アメリカで働いていた主婦77万人中、約半数は黒人がしめていたことになる。その頃出版された『有閑階級の理論』の中で、ヴェブレンは、中産階級の夫人は、夫のために閑暇を代行しなければならぬと述べたが、多くの黒人にとって、それは別世界の話だった⁽⁴⁾。

次に大都市(人口5万以上)と、それ以外の地

注(4) Thorstein Veblen, *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study of Institution* (1899) (1924 ed.) pp. 81-83. (小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波文庫、82-83頁)。

域、すなわち小都市と農村との比較を、表6に示した。大都市は商工業の中心であり、女性に対して就業機会を多く提供していることが、有業率から見てとれる。16歳以上の女性の有業率は、合衆国全体では20%であったが、大都市のみを見ると28%になっている。大都市と、それ以外の地域での差が著しいのは、アメリカ生れの白人の場合で、彼女たちは大都市で働いている率が高い。また、大都市では貧富の差も大きく、女性労働者の多い家事サービス業において、その雇い主になる層と、雇われる側の双方共、多数存在していることが考えられる。職種については以下に述べるが、大都市において黒人の有業率が高いのは、それだけ需要が大きいことを示しているともいえる。

さて、『働く女性』の中で、もっとも興味をひくのは、職業に関する統計であり、とくに本稿で重点をおく人種による相違との関係で、この部分に注目したい。とりあえず、女性と職業全般について見ておくと、1900年の国勢調査に登場する303種類の職業のうち、女性がひとりも記録されていないのは、わずか9種類の職業にすぎない。女性のパイロットもいたし、鉄道エンジニアもいたのである。しかし、女性の従事する職業はかなりの偏りを示している。『働く女性』では、全部で47種類の職業に従事する人々をとりあげているが、それだけで女性労働者全体の95%を含んでしまっているほどである。表7は、職業を大きく5グループに分類し、男性と女性との構成を比較したものであるが、女性の場合、家事サービスに従事する者が多いことが分かる。

上記の5グループのうち、女性労働者の実数が多い職業を抜き出し、それぞれ、女性労働者全体の中でしめる比重(A)と全従事者中で、女性のしめる割合(B)とを示したのが表8で

ある。女性労働者といえば、誰もが木綿工場の女工を思い浮べるであろうが、すでに表7で示した如く、1900年においても家事サービスの方がはるかに多い。とりわけ、家内使用人と給仕は、働く女性の4分の1をしめている。さらに(B)の割合が示すように、女性の多い職業中、かなりの職種で、女性が支配的、すなわち男性があまりいないことが注目に価する。家政婦、家内使用人と給仕、洗濯婦、看護婦、裁縫師、帽子屋、お針子などは、全従事者中の8割以上を女性がしめる。裁縫師や帽子屋は、とくに婦人服、婦人帽専門のそれであるので当然かもしれないが、ともあれ、女性は「女性の」仕事についていたのだと云えよう。また、教員や、速記者・タイピストなどが、「女性の」仕事になりつつあったことも分かる。なお家事サービスは、正確には家事および個人サービスであって、理髪師、ホテルなども含まれ、かつ「とくに分類できぬ」雑役とでも呼ぶべき職種に従事する男性労働者が極めて多いので、全般的には「女性の」仕事とはなっていないわけである。⁽⁵⁾

II 1900年の職種別状況

『働く女性』においては、とくに11種類の職業がとりあげられ、分析が加えられている。それらを以下に列挙する。

- ① 家内使用人・給仕(Servants and waitresses)
- ② 洗濯婦(Laundresses)
- ③ お針子(Seamstresses)
- ④ 婦人服裁縫師(Dressmakers)
- ⑤ 婦人帽子屋(Milliners)
- ⑥ 繊維工場労働者(Textile mill operatives)
- ⑦ 店員・売子(Saleswomen)
- ⑧ 事務員・コピースト(Clerks and copyist)

注(5) 家事サービスについては次を見よ。David M. Katzman, *Seven Days a Week: Women and Domestic Service in Industrializing America* (New York, 1978). タイピストなど事務職については、Margery W. Davies, *Women's Place is at the Typewriter: Office Work and Office Workers, 1870-1930* (Philadelphia, 1982).

⑨ 速記者・タイピスト(Stenographers and typewriters)

⑩ 教員(Teachers)

⑪ 農民(Farmers)

これらは、従事者の数が多いとか、女性が支配的であるとか、あるいは新しく女性に向く職業として出てきたもので、当時の働く女性を代表する職業であった。この11種類の職業について、人種別に、その仕事についている女性の割合を見てゆくこととする。それによって、その職業の特徴、そして人種別の特徴が示されるものと思われる。

① 家内使用人および給仕

表9、10にこのグループに関する統計を示しておく。表9は、女性労働者の総数(X)、家内使用人の数(Y)、家内使用人の人種分布、さらに、それぞれの人種について、家内使用人という職業が、どれくらいの重要性を持っているかを示した。白人Aについて見れば、女性労働者総数は177万、そのうち家内使用人は30万、家内使用人全体の中で白人Aのしめる割合は26.2%、さらに、この職業に従事する者が、白人Aの女性労働者全体の中でしめる割合は17.3%となっている。表10は、地域別に見たものであり、各地域での人種分布が示されている。1900年当時の地域分類では、ロッキー山脈地域以西は、すべて西部となっている。

表9の人種分布を見ると、予想したよりも各人種に差がない。移民が27.6%といちばん多いが、黒人と、両親ともアメリカ生れの白人Aは26.9%、26.2%とほぼ等しく、移民の親を持つ白人Bが19.2%と、いくぶん少い程度である。つまり、家内使用人や給仕という職業は、どの人種が独占しているということはなく、誰でも

なれたとってよい。しかし、ある人種グループの中で、この職業が持つ重要性に関しては相違があり、移民の場合には38.3%と他より、はるかに高い。アメリカに移住してきたばかりの女性が、手っ取り早くつけた職業であったかもしれない。黒人のメイドというのは、ひとつのステレオタイプとして思いうかべられるイメージであるが、黒人女性労働者の中で、家内使用人のしめる割合は28.0%と移民より低く、実数でも少い。ただし、地域別に見ると、南東部、南中部では、家内使用人の8割近くが黒人である。これに対し、北東部では半分近くが移民である。より細かい数字をあげておけば、ニューヨーク州では、約17万人の家内使用人のうち、9万3千人(53.6%)が移民、マサチューセッツ州では7万人のうち、4万7千人(69.0%)が移民となっており、これに対して黒人の割合は、ニューヨークで8.4%、マサチューセッツ⁽⁶⁾が4.7%にすぎない。

以下においては、あまり詳しい統計をかかげるのは煩雑であるので、各職業について、人種分布のみを表11に示した。但し、必要に応じて、その職業のもつ重要性、地域分布などにふれることとする。

② 洗濯婦

アメリカ全体を見ると、黒人が65.4%をしめており圧倒的に多い。黒人女性労働者全体の中の比重は18.6%である。当時すでに洗濯工場は存在したが、ここでの洗濯婦は工場で働く人々ではなく、家庭内で洗濯をする女性である。まだ電気洗濯機はなく、手作業でする辛い仕事であった。1900年に洗濯婦は総数33万人であり、洗濯工場で働く女性(これは別のカテゴリー)は1万人に満たない。なお地域別に見ると、南部では黒人が9割を越え、北東部では移民が4割

注(6) *Women at Work*, pp. 40-56. なお、以下はすべて『働く女性』を資料とする分析であるので、ここでまとめて参照箇所を示しておく。

洗濯婦 pp. 56-61, お針子 pp. 62-69, 裁縫師 pp. 70-74, 帽子屋 pp. 75-80, 繊維工場労働者 pp. 81-91, 店員 pp. 91-96, 事務員 pp. 97-101, 速記者 pp. 102-108, 教員 pp. 109-122, 農民 pp. 123-127.

(7)
をしめた。

③ お針子

ミシンは19世紀半ばから使用されていたが、お針子は小さな作業場で、長時間、低賃金で働かねばならなかった。衣服産業という、ニューヨーク市のユダヤ系移民を思い浮かべるが、アメリカ全体を見ると、アメリカ生れの両親を持つ者が多い。ただし、大都市とそれ以外の地域とでは人種構成に差があり、5万人以上の人口を有する大都市では、白人B（移民の子）と移民とを合わせると約66%をしめている。それ以外の地域では、逆に60%がアメリカ生れの両親を持つ白人である。衣服産業は、この時期に南部へ入りつつあったが、黒人のお針子は全体の1割にも達していない。ただし、南部について見ると約4分の1程度をしめており、後に見る繊維工場労働者の場合とは状況が異なる⁽⁸⁾。

④ 婦人服裁縫師

同じ洋服の仕立屋といっても、婦人服は圧倒的に女の仕事で、女性従事者34万人に対し、男性は2千人しかいない。紳士服の仕立屋（Tailors and tailoresses）となると、男性従事者16万人に対し、女性も6万人を数える。なお、お針子の一部は裁縫師に雇われているが、総数を比べると、お針子は14万人、紳士服および婦人服裁縫師の合計は56万であって、お針子を使っていない裁縫師の方がはるかに多いことが分かる。この婦人服裁縫師は北部に集中しており、8割近くが北部にいる。白人がほとんどをしめているのは、地域分布と同時に、ある程度の技術を要する職業であるためかもしれない。移民や移民の子に比して、アメリカ生れの両親を持つ白人

が多いことから、このことが推測される。

⑤ 婦人帽子屋

婦人帽の製造は、婦人服の仕立と同じく、もっぱら女性の仕事であり、また家内使用人や洗濯婦よりも格の高い仕事といえた。したがって、ほぼ白人が独占しており、それもアメリカ生れの両親を持つ白人が多い。婦人帽子屋ひとりあたりの女性人口（16歳以上）を見ると、全国平均では283人であるが、北部では226人、南部では600~700人と、北部で需要が多く、とくに大都市で重要な職業であった。

⑥ 繊維工場労働者

ここで繊維工場とは、木綿、羊毛、絹その他の合計である。黒人は0.2%にすぎず、白人の3グループが、それぞれ3分の1ずつをしめている。なお、それぞれの人種にとっての重要性をみると、白人A 4.2%、白人B 7.1%、移民9.4%、黒人0.04%となっており、移民にとっての重要度が最も高い。

なお、北部と南部とに分け、とくに南部における人種別分布を見ると、白人Aが93.7%、白人Bは4.5%、移民は0.7%、黒人は1.2%となっている。南部における繊維産業は、この頃から発展しはじめたが、工場労働力という点から見ると、アメリカ生れの両親を持つ白人が独占しており、黒人女性の低賃金労働をあてにしたのではないことが分る。移民の子や移民が少ないのは、もともと南部に移民が少なかったためであり、北部についての数字を見ると、移民の子と移民の両グループで8割近くをしめている⁽⁹⁾。

⑦ 店員・売子

当時、大都市に出現しつつあったデパートは、

注(7) Katzman, *Seven Days a Week* の各所で、洗濯婦について論じている。洗濯工場働く女性については次を見よ。Carole Turbin, "And We Are Nothing but Women: Irish Working Women in Troy," in Carol R. Burkin and Mary B. Norton, eds. *Women of America: A History* (Boston, 1979), pp. 203-222.

(8) 次を参照せよ。Christine Stansell, "The Origins of the Sweatshop: Women and Early Industrialization in New York City," in Michael H. Frisch and Daniel J. Walkowitz, eds. *Working-Class America* (Urbana, Ill., 1983), pp. 78-103.

(9) 南部における繊維産業についての古典的研究は、Broadus Mitchell, *Rise of the Cotton Mills in the South* (Baltimore, 1921).

女性の職場として工場よりも格が上と見なされていた。デパートで働く女性は、工場労働者に比べて、衣服や住居によりお金を使うというような調査結果もある。この職業はアメリカ生れの白人が9割ほどをしめ、残りの1割が移民である。英語力が関係しているとも思われるが、黒人には縁のない職場であり、0.3%、実数で378人にすぎない。⁽¹⁰⁾

⑧ 事務員・コピイスト

いわゆるオフィスワークは、南北戦争後の企業規模の拡大と共に成長してきたが、女性も安い労働力として、かなりが働いていた。この職業は基本的には読み書き能力を必要としているので、アメリカ生れの両親を持つ白人が最も多い。なお、コピイストとは、速記者が記録したものを清書する職業であって、タイピストとは異なる。なお黒人は1%にも充たない。

⑨ 速記者・タイピスト

この職業は、単なる事務員やコピイストよりも、特殊な技能を必要とする。⑧の男女比は、87%対13%と男性が多いが、⑨においては、23%対77%と逆転しており、女性の職業といえよう。これは、当時の高等学校卒業率が女性の方が高かったことを考え合わせると、納得がゆく数字である。当然、北部に多く、白人A、Bがほぼ独占していた。全国で、約8万5千人が働いていた。⁽¹¹⁾

⑩ 教員

すでに記したように、教員という職業は、南北戦争以前から女性の職業であった。最初は、夏の間だけの手伝いなどという形で雇われていたが、1830、40年代以降の義務教育の普及により、教育を受けた女性の職場として広がっていった。アメリカ生れの両親を持つ白人が63.5%と最も多いのは当然かもしれない。移民、黒人は、

各5.3%、4.1%しかしめていないが、実数は1万7千人、1万3千人ずつ記録されている。南部では、学校は人種別に分離されており、黒人の学校は小学校のみで、年間4カ月くらいしか開かれなかった。しかし黒人女性にとって、教員という職業は社会的活動に最適の場であり、黒人女性のリーダーの多くは、小学校教師から出発している。なお、南部では、教員の約2割が黒人であった。⁽¹²⁾

⑪ 農民

農業は通常、家族農業としておこなわれており、女性農場主は必ずしも一般的とは思えない。しかし、全国では約30万人の農民(農業労働者ではない)が記録されており、その6割近くはアメリカ生れの両親を持つ白人である。また地域別に南部を見ると、4割近くの農民は黒人であった。

以上、『働く女性』がとくに採り上げた11種類の職業について見た。人種構成について云えることは、白人が支配的な職業が多く、黒人のしめる割合が多いのは洗濯婦のみという事実である。有業人口率の高さにもかかわらず、黒人女性の選択し得る職場は限られていたのである。ここで、黒人女性労働者の多い職業を、上記11種に限らずに取り出してみると、農業労働者と家内使用人が上位2位をしめ、共に従事者が30万人を越えている。次は洗濯婦で20万強であり、この3種が黒人女性の三大職業といえる。その他、農民と一般労働者が各7万人、看護婦、教員、婦人服裁縫師、お針子が1~2万人であった。黒人女性労働者の総数は112万人弱であったが、その内訳は、農業労働者32%、家内使用人28%、洗濯婦19%であり、この三者で8割近くをしめる。教員のような仕事には1%程度し

注(10) Susan P. Benson, *Counter Culture: Saleswomen, Managers, and Customers in American Department Stores, 1890-1940* (Urbana, Ill., 1986) は、経営史としても女性史としても、極めて興味深い。

(11) Davies, *Women's Place* を見よ。

(12) 古典的研究は、Thomas Woody, *A History of Women's Education in the United States*, 2 vols (New York, 1929).

かつけなかったのである。

ここで、黒人女性労働者にとって、繊維工場が持った意味についてふれておきたい。白人女性にとっては、繊維工場は労働市場への最初の入口だったからである。上に記した如く、教員は、黒人女性労働者の1%にすぎぬとはいえ、実数では1万人をこえていた。ところが、繊維工場労働者の場合、白人の3グループは、それぞれ7～8万人ずつ就業しているにもかかわらず、黒人は合計481人しか記録されておらず、黒人女性労働者中0.04%にすぎない。南部へ進出した繊維工場は、白人女性労働者をひきつけるために、黒人女性を雇用しない方針をとったのであった。1900年のある調査報告によれば、工場の中で黒人を見かけることは、荷物運び以外では、ほとんどなかったという。また1910年の綿工場における女性児童労働についての調査によれば、南部の152工場中、黒人女性を雇用していたのは18工場にすぎず、しかも彼女達の仕事は掃除婦であった。繊維工場の扉は、黒人女性に対しては閉じられていた⁽¹³⁾のである。

III 1890年との比較

『働く女性』には1890年の統計も、1900年との比較のために含まれているので、以上に見た状況が、その10年間にどう変化してきたかを一瞥しておきたい。対象は前記11の職業に限り、統計としては従事者の人種別増加率のみを表2としてかかげる。人種構成などに大きな変化があった場合には、本文中で数字をあげることに⁽¹⁴⁾する。

① 家内使用人・給仕

全体として見ると、1890—1900年の増加率は、わずか6%であって、この仕事が女性の職場として成長する分野ではなかったことが分かる。

人種構成を見ると、1890年には移民が32%と最も多かったのに対し、1900年にはいく分平均化されてきた。ただし、白人Bすなわち移民の子の増加率が高いことから見て、移住時には幼なかった子供が成長して、この職業についたと考えることもできる。1890年には、移民の女性労働者中、48.4%がこの職業であったことからして、もっとも手っ取り早くつける職業であったといえよう。1900年には、その割合は38%に下がっている。なお、この職業につく女性は、女性労働者全体の中で、30.9%(1890)から、24.2%(1900)へ減少したのであって、上に記した通り、成長分野でなかったと云える。

② 洗濯婦

この職業は、家内使用人とは異なり、最初から住み込みではなく通いであったため、いわば束縛が少なく、働く側からは好まれた。全体として1890—1900年に54.6%増加し、とくに白人A、Bで増加率が高いことは、その証拠ともいえる。人種構成の点では、黒人のしめる割合が69.9%(1890)65.1%(1900)といずれも高い。また、黒人女性労働者中、洗濯婦のしめる割合は17.3%から18.6%と増加しており、彼女たちにとっても、家内使用人より自由のある点で好まれた職業だった。

③ お針子

この職業は、本来の工場よりは、下請業者の作業場たる Sweatshops で働かされる場合が多く、労働条件は劣悪であった。総数としては変化はないが、女性労働者全体の中での比重は3.9%(1890)から、2.9%(1900)へと、わずかに減少し、とくに白人A、Bにとって重要性は減少した。人種構成を見ると、1890年には、アメリカ生れの両親を持つ白人が48.7%をしめていたが、1900年には42.9%に減少した点が目立つ。逆に移民は14.7%から18.3%に上昇したが、黒

注(13) かかる状況一般については、次を見よ。Teresa Amott and Julie Matthaei, *Race, Gender and Work: A Multi-Cultural Economic History of Women in the United States* (New York, 1991).
又、Kessler-Harris, *Out to Work* も参照のこと。

(14) 資料は *Women at Work* であり、参照箇所は、注(6)と同じである。

人については変化は少い。白人が9割以上をしめている点では兩年度共、同様である。

④ 裁縫師

全体としての変化は少く、人種構成においても、あまり変化はない。ただし、黒人の裁縫師が、65.4%、実数で7,500人から12,000人へ増加したことが目立つ。とはいえ、黒人のしめる割合は2.6%(1890)から3.6%に増大しただけで、白人女性の支配的な職業であった。

⑤ 帽子屋

全体として40%以上増大している。これは都市化あるいは富裕層の増加に関係しているかもしれない。白人女性が完全に支配しており、黒人女性の従事者は兩年度とも1%に充たない。表12で、51.8%の減少となっているが、実数では359人が、173人に減少したのみである。1900年、帽子屋の総数は8万5千人であった。

⑥ 繊維工場労働者

1890年から1900年にかけて総数は増加しているが、実質的にはアメリカ生れの両親を持つ白人のみが増加していると云ってよい。表12での増加率は48.1%だが、この10年間に増加した実数約4万人の7割近くを彼女たちがしめている。これは南部への綿工場の進出により、北部では低品質の綿布が生産されなくなり、移民や移民の子の割合が減少したことと対照的である。黒人は、総数でも減少しており、南部における綿業の発達、白人女性の雇用のみを増加させたことが、はっきりと示されている。

⑦ 店員・売子

店員や売子の増大は、デパートなどの発展の結果である。この職場は、一見、女性の職場のように考えられるが、実際にはそうでない。1900年に約60万人が、このカテゴリーに含まれていたが、女性のしめる割合は25%に充たなかった。ただし、ニューヨーク、シカゴ、フィラデルフィア、ボストンなど、デパートが増加した大都市では女性店員の比率は高い。各人種とも増加しているようには見えるが、実際は白人が独占していたことは、すでに記した通りであ

る。

⑧ 事務員・コピイスト

この職場は、すでに成長してきており、この10年間にとくに増大したわけではない。とはいえ、実数で6万人から8万人に増加しており、表12では、どの人種も増加している。ただし、人種構成では、1890年も、1900年もアメリカ生れの白人が9割をしめ、黒人は1%にも達していない。

⑨ 速記者・タイピスト

この職業が著しい成長を示したのは、タイプライターの普及による。1890年には、総数2万1千人であったのが、8万6千人となり、単なる事務員・コピイストより多くなった。また、圧倒的に女性の職場であったことは前に記した。こうした中で、黒人女性の増加率が0%であることは、この職業の性格を示しているといえよう。

⑩ 教員

教員の増加は、あまり表12では目立たないが、実数では25万から33万へと、著しく増加した。とくに、移民の子と黒人の増加率が高い。人種構成の点では、アメリカ生れの両親をもつ白人の割合が、67.6%から63.5%へとわずかに減り、その分、移民の子の割合が増えた。黒人は7,800人(3.2%)から、13,500人(4.1%)と割合もいく分増加した。南部における黒人教育の進展を、一応物語っている。

⑪ 農民

一応、増大しているが、農民と農業労働者との区別が明確でなかったため、はっきりした比較はできない。

さて、1890年と1900年を比較してみると、一般的に女性労働者が増加している中で、人種構成にわずかながら相違が見られる。ここでとり上げた11種の職業の中で、アメリカ生れの両親を持つ白人のしめる割合が、いく分減少傾向を示したのは、家内使用人、お針子、帽子屋、速記者、教員であるが、ともあれ、さまざまな職

業で、他の人種にも就業機会が増加してきたと云えよう。これは、黒人女性に関しても、ある程度はいえることであるが、技能を要求されるような事務系の仕事への道は、まだ閉ざされていたわけである。こうした一般的傾向の中で、繊維工場労働者の場合のみ、アメリカ生れの両親を持つ白人の増加が著しかったのは、繊維工場の南部への移動によるものだった。

IV 1920年の状況

前節では、アメリカ生れの両親を持つ白人女性を先頭に、労働市場へ進出してきた女性労働者が、次第にその数を増し、かつ、移民の子、移民、あるいは黒人にも機会が拡がりつつある状況を示した。こうした動きが、その後、いかなる形をとって現われたかを、本節で検討する。前節で1890年と比較したので、年度的には1910年の国勢調査をとり上げるべきかもしれないが、ここでは1920年のそれをとり上げたい。その理由は二つある。第一に、1910年の国勢調査では、調査員への指示の中で、女性・児童を含むすべての人 (every person enumerated) について、職業を記入すること、となっており、「女性や児童の職業は、男性のそれと同様に重要であり、……彼らが職業についていないものと考えてはならない」と注意書きがあったため、いく分過大に報告されている。1920年には、すべての人について職業を記入せよとの指示はなくなった。第二に、より重要な点として、第1次大戦を経た1920年の方が、20世紀のアメリカの特徴をはっきり示していたことである。アメリカにおいて、都市人口が農村人口より多くなったのは、この1920年国勢調査のときであり、女性労働と

いう視点から見ても、このことは重要である。さらに移民流入の時代が終了したことも、本稿の関心からは重要であり、かかる理由で1920年⁽¹⁵⁾を選んだ。

ところで、1920年の国勢調査においては、職業分類等が変化しているのだから、そのまま前の状況と比較することはできない。この点について最初に記しておこう。1920年、職業は大きく9種類に分類されていた。すなわち、農業、鉱業、製造・機械工業、運輸・通信業、商業、公共機関、専門職、家事サービス、事務職である。1900年の分類は5種類であったが、これと比較すると、いかなる分野が重要になり、多様化したかが分かる。1900年には、農業、専門職、家事サービス、商業・交通業、製造業であったから、商業・交通業が、運輸・通信業、商業、事務職と分化したことになる。また、政府部門の拡大により、公共機関という分類がつけられたが、これには「他に分類できぬもの」と但し書がついている。専門職や事務職に入らぬものという意味であるので、政府に雇われている者すべてが含まれているわけではない。なお、細かい分類については、個別の職業について述べるときに、くわしく記すこととする。さらに付け加えておくと、1920年では、労働者は年齢10歳以上の者となっており、16歳以上となっていた1900年と⁽¹⁶⁾実数を比較することはできない。

まず、1900年の場合(表8)と同様、女性にとって重要な職業を示しておこう。表13は、女性従事者が10万人以上の職業をひろい出し、上位6種類までについては、女性労働者の中での割合、すべてについて、その職業で女性のしめる割合を示してある。女性の従事者が1900年に最も多かったのは、家内使用人・給仕であった

注 (15) *U. S. Census, 1920, Population, Vol. 4, Occupations* (Washington, D. C., 1923). なお、国勢調査の調査員への指示の文章は、1910年のそれをも含め、pp. 25-30 に記されている。

(16) 1920年の国勢調査では、とくに女性についてまとめてあるわけではないので、各所から関連のある部分を引き出して検討を加える。分類については *U. S. Census, 1920, Vol. 4*, pp. 12-17. 以下本稿でとりあげるのは、全国統計のうち、性別で示された部分 (pp. 33-55)、人種別 (pp. 339-363)、結婚形態別 (pp. 691-744) の部分である。

が、1920年においても、家内使用人がいちばん多い。給仕は別分類になっているが、両者を加えると、女性労働者全体の13.2%をしめる。もっとも、1900年にはこの割合は24.1%であったから、その比重は著しく低下したとってよい。女性の職業が多様化し、さまざまな職場で働けるようになったことの現われであろう。

家内使用人に次いで多いのは農業労働者、以下、教師、速記者およびタイピスト、繊維産業の労働者(半熟練労働者となっている)、事務員(商店のそれを除く)、洗濯婦、商店の売子、帳簿係、衣服産業の労働者(これには工場労働者と、それ以外がある)、家政婦、電話交換手、商店の事務員、看護婦(これは専門職としてのTrained nurses)、産婆および看護婦(後者はNot trained nurses)、前述の給仕、下宿屋となっている。1900年であった裁縫師とお針子は、まとめられて、工場以外の衣服産業従事者となっている。また、帽子屋は実数が10万人以下のため、表13には入っていない。農業は、さらに分類されているが、女性が多いのは通常の農業である。

上記の職業のうち、工場以外の衣服産業従事者、電話交換手、教員、看護婦、下宿屋、家政婦、洗濯婦、産婆、家内使用人、速記者およびタイピストは8~9割を女性がしめ、まさに女性の仕事といえた。この状況は1900年の場合とそれほど変化はないが、教員、看護婦、速記者およびタイピストなどで比重が高まっており、女性の職場として固定化しつつあったと見られる。さらに、その他の職場でも、女性の比率は高まりつつあった。事務員について見ると、1900年には事務員およびコピーリストとなっており、女性は13.3%にすぎなかった。1920年には、それが商店で41.2%、一般のオフィスで31.7%となっている。また、帳簿係にしても、28.8%から48.9%へと上昇しており、オフィスでの女性事務員の増大が目立つ。これには第一次大戦の影響が残っているかもしれない。商業部門の

売子という分類で女性の比率が低いのは、いわゆるセールスマンも同じ職種に含まれているからである。

電話交換手の場合、1900年には「電信および電話」という分類であった。その分類では女性労働者は、29.8%をしめるだけであったが、1920年には、この二つは独立している。そして、電話交換手については、女性が93.8%をしめる。もっとも、電信技師について見ると、女性は21.2%にすぎない。アンドリュー・カーネギーは、その自叙伝の中で、電信技師に女性を雇ってみたところ、この仕事は、彼女たちに適しており、男性より信頼がおけたと書いている。そして、今や女性が、さまざまな職場に侵入(invade)してきているが、電信技師ほど女性に向く仕事はないとも記している⁽¹⁷⁾。しかし、実際には、電話は女性、電信は男性と、男女の分業がおこなわれたと見るべきであろう。なお、1920年に両者を合わせてみると、その72.4%は女性労働者であって、これは電話の普及の結果といえよう。

次に、1900年においてとりあげた11種類の職業について、1920年の状況を示す。統計としては、表12と同様に人種分布をあげておく。分類の変化しているものに関しては、本文中で記す。(表14)

① 家内使用人および給仕

1920年の国勢調査では、この両者は分けられているが、1900年との比較のため合わせて扱う。先に述べたように、女性労働者全体にとっての、この職業の重要性は減少していた。しかし、人種別に、この職業が持っていた重要性を見ると、白人A(8.1%)白人B(8.3%)移民(20.8%)黒人(26.4%)となっており、1900年の数字(表9)と比較すると、黒人の場合だけは、あまり変化がない。移民の場合、1890年には48.4%、1900年に38.3%であったのが、今や20.8%まで減少

注(17) Andrew Carnegie, *Autobiography* (Boston, 1920), pp. 60-70.

したわけであり、もはや家内使用人は移民女性労働者にとっても、意義を失いつつある分野となった。その結果、表14に示す如く、人種構成としては、黒人が最も大きな比重をしめることとなった。これは、黒人が移民にとって替ったというよりは、黒人には他の職業への道が閉ざされていた、というべきであろう。

② 洗濯婦

これに関連するものとして、洗濯工場労働者、洗濯屋（所有者・経営者）があるが、ここでとり上げたのは、工場以外の洗濯婦であり、いわば昔ながらの通いの洗濯婦であった。但し、この年代は、家庭用の洗濯機がそろそろ普及しはじめる頃であったので、この職業は、やがて時代おくれとなる運命にあった。1920年、洗濯婦は38万人、洗濯工場労働者は12万人であったが、後者のうち、女性のしめる割合は3分の2程度であった。洗濯屋（所有者・経営者）の中で、女性のしめる割合は1割程度であった。

洗濯婦の人種構成を見ると、黒人が約74%をしめている。1900年には65%であったから、この時代おくれになりつつある職業で、黒人の比重が増大したことが分かる。洗濯婦という職業の、各人種にとっての重要性は、白人の場合、すべて3%以下であるが、黒人の場合のみ、18%が、この仕事についていた。①の家内使用人と合わせると、黒人女性労働者の44%が、この二つの職業についていたわけである。

③④ 裁縫師・お針子

この二つの職業は、1920年の国勢調査では一つにまとめられてしまっている。このこと自体、手仕事である仕立業の重要性が失われてきたことを示すと同時に、同じ衣服産業における工場制の拡大を物語っている。実際、1900年には裁縫師とお針子は、合わせて48万人弱を数えたが、1920年には24万人弱と半減してしまった。女性労働者全体にしめる比重から見ても、9.9%から、2.8%へと落ちこんでしまっている。人種

構成の面では、アメリカ生れの両親を持つ白人が、1900年にも1920年にも5割近くをしめるが、残りの3つのグループの中では平均化が見られる。とくに黒人は増加しているように見える。しかし、実数で比較すれば、それは単に、白人従事者が5割前後も激減しているのに対し、黒人だけが、わずか、247人その数を増加させた結果にすぎない。

ここでも、黒人だけが取り残されている状況が浮び上がってくる。衣服産業の従事者の中で、工場労働者は、半熟練工として約27万人存在するが、白人A、B、移民が、それぞれ8～9万人で、約3分の1ずつをしめている。これに対して黒人は実数が7,600人強、全体の2.9%をしめているにすぎない。同じ衣服産業の中でも、古くからの分野に残ったままで、なかなか工場に入ってゆけない黒人の姿が示されているといえよう。

⑤ 帽子屋

1920年の国勢調査では、製造のみでなく、婦人帽販売という項目も入っているが、実質的には1900年のそれと大差はないものと思われる。1900年に8万3千人であったものが、1920年には7万人に減少しており、一見、都市化の進展に逆行しているようにも思われる。帽子屋は、大都市に多い職業だったからである。しかし、これは趣味や流行の変化と関係があるろう。19世紀と20世紀とを比較した調査の中で、帽子に対する家計支出の割合は、都市でも農村でも、20世紀の方が低くなっている。従事者の人種構成はあまり変化がなく、相変わらず黒人の割合は少ない。流行が変りつつあるとはいえ、帽子屋はやはり高級な職業であったからだろう。⁽¹⁸⁾

⑥ 繊維工場労働者

1920年の場合、半熟練労働者と一般労働者とに分けられ、後者には工場内の雑役労働者が含まれている。表13の48万人という数字は半熟練工の人数であり、一般労働者約3万6千人は入

注(18) 家計支出については、Lance E. Davis, Richard A. Easterlin, William N. Parker, eds. *American Economic Growth: An Economist's History of the United States* (New York, 1972), p. 78.

っていない。ところで、同じ繊維工場に雇われているといっても、両者には大きな差があり、これは人種構成の面からも明らかである。なお、実数の点で、1900年の約25万と比較すると倍増しているが、これは、1920年の数字が10歳以上

(1900年は16歳以上)となっているため、児童⁽¹⁹⁾労働の多い繊維工場の特殊性によるものである。

さて、半熟練工と一般労働者のいずれにおいても、アメリカ生れの両親を持つ白人が多く、同じ白人の中でも、このグループの比重が増加している。これは綿工場の南部への移動と、親類の者が同じ工場で働くことが多いという事情によるものであろう。むしろ注目したいのは黒人で、半熟練工では0.9%しか存在しないが、一般労働者では11.2%となっていることである。実数で見ると、半熟練工は4,500人、一般労働者は4,000人であり、工場で働いているといっても、半分近くは雑役など下級労働に従事していたことが分かる。

なお、半熟練工と一般労働者を合計して、繊維工場労働者とみなすと、総数51万、そのうち白人A20万、白人B17万、移民13万、黒人1万弱であり、各人種にとっての重要性は、各、5.4%、8.0%、11.8%、0.5%、となっている。繊維工場は伝統的な女性の職場ではあったが、1920年には、もはや魅力の薄れつつある分野であり、黒人は別として、白人の中では移民にとっての重要性が一番高い点に、それが示されているかもしれない。

⑦ 売子

商店の事務員と売子とは別になっており、これは単なる販売員である。また小売業という別の分類もあり、商店の店主はそちらに含まれる。デパートなどが増加し、第3次産業としての商業が発達したことにより、売子の総数は1900年から1920年までに14万から36万に増えている。

前記の如き年齢の問題はあるが、繊維工場労働者の場合とは、いく分事情が異なる。この職場では、白人Aのしめる割合が高まり、黒人は実数でわずか2,300人、0.6%をしめるにすぎない。

⑧ 事務員

1920年の分類では、事務職という大分類の下に、1. 代理人および外交員、2. 帳簿、会計係、3. 事務員(商店のそれを除く)、4. メッセンジャー、5. 速記者およびタイピストとなっている。1900年には、事務的職業は、商業および交通という大分類の中に入っていたが、事務職という大分類が出現したこと、また分類が細かくなったことは、オフィス・ワークの発達もしくは重要性の増大を示していよう。もっとも、タイプライターの普及により、コピイストのように存在意義を失っていった職業もある。かつては、公用の書簡でも、タイプで打ったものは失礼と思われていたが、もはやタイプで打っていないものは、私用の手紙に限られてしまっていた。

ところで、事務職は、給与の点でも、社会的地位の点でも、専門職に次ぐ魅力的な職場であったが、これに含まれる女性総数140万人のうち、移民は9万人(6.4%)黒人は8千人(0.6%)にすぎず、アメリカ生れの白人が独占する職場であった。とくに、アメリカ生れの両親を持つ白人が、どの職場でも5割以上をしめていた。

⑨ 速記者・タイピスト

この職業は、1900年にも同じ小分類として存在したが、1900年の8万5千人(16歳以上)から、1920年の56万人(10歳以上)へと著しい増加を示した。この職業につくには技能が要求されることもあって、アメリカ生れの白人が多い。女性が圧倒的に多いのみばかりでなく、アメリカ生れの白人女性が独占していた。これと同じ状況は、電話交換手(分類としては運輸通信業)の場

注(19) 繊維産業における児童労働の問題については、下記の古典的研究が、初期の状態について述べている。もちろん、女性労働に関するものも記されている。Caroline F. Ware, *The Early New England Cotton Manufacture* (Boston, 1931). なお、概説書であるが、次を参照せよ。Julie A. Matthaei, *An Economic History of Women in America* (New York, 1982).

合にも見られたので、表14に示しておいた。約18万人の女性交換手が存在したが、移民は7,000人、黒人は500人弱しか記録されていない。オフィスワークは、1920年にも、まだ一部の女性にしか開放されていなかったと見てよからう。

⑩ 教員

1920年、専門職につく女性約100万人のうち、64万人は教師であった。ちなみに、次に多いのは看護婦の14万人である。さて、64万という数は、1900年の33万人の2倍に近い（この際、年齢の問題は無視してよい）。そして、男女比では、1900年の73.4%から、1920年には83.9%と、女性がますます多くなってきている。黒人のしめる割合は、あまり変らないが、実数は3万人近くなった。専門職のうち、女性のしめる割合が大きいのは、教師、看護婦(96.3%)のほか、図書館員(88.2%)、宗教・慈善・福祉関係(65.6%)くらいであって、女性は、女性用の仕事についていたといえる。⁽²⁰⁾

⑪ 農民

農業は男性優位の職業であって、女性の場合、夫の死後、その農場をひきついだ例が多いと思われる。ただし、妻が農業労働者として記録されている例はかなり多い。農民の3分の1、農業労働者の3分の2を黒人がしめている。黒人女性で職業についていると報告されている者の、なんと39%が農民・農業労働者であって、都市化・工業化してゆくアメリカにとり残された彼女たちの姿が示されている。

V 結論にかえて

以上、1900年の『働く女性』の統計を中心に、19世紀末から第1次大戦後に至る間のアメリカ女性労働について見た。女性労働者の増加と、

女性の職場の拡大の中で、家庭の外部にあっても、男性のそれとは異なる「女性の職場」が形成されていったことが分かる。さらに、そうした女性の仕事の中でも、新らしく魅力的な職場は白人、とくにアメリカ生れの白人女性が独占し、黒人女性は昔ながらの家事サービスに従事せざるを得なかったことが明らかである。かつて、ニューイングランドの若い女性に、いわば初めて近代的職場を提供した綿工場にしても、南部へ移動したものは、黒人に門を開放していなかった。性差別の中で、さらに人種差別が存在したのである。もっとも、黒人女性の状況を「出口なし」のようにとらえることは正しくない。最後に結論にかえて、最も伝統的で黒人の多い家事サービス労働者⁽²¹⁾をとり上げ、その変化を述べておきたい。

もともと、アメリカ社会では家事労働は女性の手にゆだねられており、女性の仕事と考えられていた。そこで、アメリカ生れの白人女性にとっても、他人の家での家事サービスは、結婚までの一時的職業として受け入れられていた。これは「住み込み」が一般的形態であったが、それは「家庭的」という意味で保守的価値観にも合致した。ただし、移民や黒人にとっては、住む場所と食事が与えられるということの方が重要であったかもしれない。ところで、アメリカ生れの白人女性が、次第に他の職場へ進出していったとき、これに替ったのは移民であった。この現象は、とくに北部の都市で顕著であり、言葉に不自由な彼女たちにとって、家事労働以外の選択肢はなかったともいえる。都市化と工業化は、工場、商店、オフィスなど、アメリカ生れの白人女性の職場を拡げると同時に、所得水準の上昇をもたらし、家事サービスへの需要をも増加させた。

注(20) 専門職に関して次を見よ。Barbara J. Harris, *Beyond Her Sphere: Women and the Professions in American History* (Westport, Conn., 1978).

(21) Katzman, *Seven Days a Week*; Elizabeth Clark-Lewis, "This Work Had a End: African-American Domestic Workers in Washington, D. C., 1910-1940," in Groneman and Norton, *To Toil the Livelong Day*, pp.196-212.

移民は、本稿ではまとめて扱ったが、内部の差異も忘れてはならない。例えば、イタリアからの移民は、自分の家庭との両立を重視するので「住み込み」を嫌ったし、ユダヤ系移民は、家事サービスよりは、衣服産業を好んだ。数も多く、長い間、家事労働に従事したのはアイルランド系移民で、これは母国にも同じ慣習があったためであろう。

さて、アメリカ生れの白人が家事労働から離れ、移民の流入も減少してくると、相対的に重要になってくるのが黒人である。当初、黒人は北部には少なかったが、次第に北部大都市へ移住してくるようになり、そこでの仕事は、とりあえず家事労働であった。すでに見た通り、黒

人は結婚後も働く者が多かったが、彼女たちは、家庭と両立できる形態を好んだ。それ故、南部においては「住み込み」より「通い」が多くなっていた。北部の都市でも、黒人が増加してくるにつれ、「通い」が一般的になっていった。さらに洗濯婦を中心に「毎週何曜日」というように、決ったスケジュールで、自分の好む日に働ける形式がおこなわれるようになった。まさに既婚女性のための形態といえよう。このように、時代の波にとり残されたように見える家事サービスにも変化はあったし、それは黒人女性たちが働きやすい方向に変わっていったのである。

岡田 泰 男 (経済学部教授)

黒川 春子 (経済学部卒)

表1 女性労働者の増加

年 度	男性 (16才以上)			女性 (16才以上)		
	総 数	有業人口		総 数	有業人口	
		実 数	%		実 数	%
1900	24,851,013	22,489,425	90.5	23,485,559	4,833,630	20.6
1890	20,133,514	18,217,797	90.5	18,957,672	3,596,615	19.0
1880	15,359,866	13,919,755	90.6	14,752,258	2,353,988	16.0

Women at Work. p.20

表2 女性労働者 (人種別分布)

分 類	女 性 (15 才 以 上)					
	1900			1890		
	総 数	有業人口		総 数	有業人口	
実 数		%	実 数		%	
合 計	24,249,191	4,997,415	20.6	19,602,178	3,712,144	18.9
白人 A	12,561,813	1,824,690	14.5	10,530,675	1,310,148	12.4
白人 B	4,475,907	1,137,649	25.4	3,064,321	774,751	25.3
移 民	4,445,332	861,274	19.4	3,809,919	756,006	19.8
黒 人	2,690,583	1,162,218	43.2	2,175,550	867,717	39.9
そ の 他	75,556	11,584	15.3	21,713	3,522	16.2

Women at Work. p.20

表3 男女労働者 (年齢別分布) : 1900年

年 令	有 業 人 口 (16 才 以 上)			
	男 性		女 性	
	実 数	%	実 数	%
合 計	22,489,425	100.0	4,833,630	100.0
16-24才	5,544,651	24.7	2,136,445	44.2
16-20	2,855,425	12.7	1,237,967	25.6
21-24	2,689,226	12.0	898,478	18.6
25-34	5,993,847	26.7	1,168,342	24.2
35-44	4,704,682	20.9	675,032	14.0
45-54	3,250,259	14.5	440,825	9.1
55-64	1,856,181	8.3	256,705	5.3
65以上	1,063,856	4.7	138,587	2.9
不 明	75,949	0.3	17,694	0.4

Women at Work. p.11

表4 女性労働者の年令分布(人種別):1900年

年令	女性(16才以上)														
	白人A				白人B				移民				黒人		
	総数	有業人口		総数	有業人口		総数	有業人口		総数	有業人口		総数	有業人口	
		実数	%		実数	%		実数	%		実数	%		実数	%
合計	12,130,161	1,771,966	14.6	4,288,969	1,090,744	25.4	4,403,494	840,011	19.1	2,589,988	1,119,621	43.2			
16-20才	2,092,138	434,822	20.8	862,537	345,022	40.0	339,349	192,817	56.8	531,138	263,393	49.6			
21-24	1,490,273	318,070	21.3	657,463	248,202	37.8	372,474	154,743	41.5	386,790	176,325	45.6			
25-34	2,860,606	399,048	13.9	1,323,801	297,768	22.5	1,020,689	202,132	19.8	639,359	266,942	41.8			
35-44	2,115,226	244,348	11.6	868,394	130,682	15.0	913,574	119,164	13.0	429,442	178,802	41.6			
45-54	1,590,440	182,106	11.5	366,145	46,903	12.8	735,067	86,069	11.7	293,688	124,023	42.2			
55-65	1,081,431	120,592	11.2	137,986	15,975	11.6	557,010	54,534	9.8	157,579	64,534	41.0			
65以上	864,846	67,624	7.8	69,362	5,367	7.7	456,587	28,251	6.2	128,338	36,539	28.5			
不明	35,201	5,356	15.2	3,281	825	25.1	8,744	2,301	26.3	23,654	9,063	38.3			

Women at Work. p.12

表5 女性労働者と結婚(人種別):1900年

分類	女性(16才以上)															
	合計				未婚				既婚				離婚			
	総数	有業人口		総数	有業人口		総数	有業人口		総数	有業人口		総数	有業人口		
		実数	%		実数	%		実数	%		実数	%		実数	%	
合計	23,485,559	4,833,630	20.6	6,843,140	3,143,712	45.9	13,810,057	769,477	5.6	2,717,715	857,005	31.5	114,647	63,436	55.3	
白人A	12,130,161	1,771,966	14.6	3,483,867	1,177,420	33.8	7,251,375	217,257	3.0	1,332,334	347,563	26.1	62,585	29,726	47.5	
白人B	4,288,969	1,090,744	25.4	1,802,436	929,852	51.6	2,212,946	68,976	3.1	256,953	83,107	32.3	16,634	8,809	53.0	
移民	4,403,494	840,011	19.1	832,945	586,173	70.4	2,855,446	102,169	3.6	702,585	145,240	20.7	12,518	6,429	51.4	
黒人	2,589,988	1,119,621	43.2	710,031	447,750	63.1	1,443,817	376,096	26.0	414,107	277,655	67.0	22,033	18,120	82.2	
その他	72,947	11,288	15.5	13,861	2,517	18.2	46,473	4,979	10.7	11,736	3,440	29.3	877	352	40.1	

Women at Work. p.15

表6 女性労働者と居住地（人種別）：1900年

分類	女性（16才以上）					
	大都市（住民5万以上）			その他の地域		
	総数	有業人口		総数	有業人口	
		実数	%		実数	%
合計	5,855,790	1,657,728	28.3	17,629,769	3,175,902	18.0
白人 A	1,703,955	414,954	24.4	10,426,206	1,357,012	13.0
白人 B	1,700,209	554,806	32.6	2,588,760	535,938	20.7
移民	2,095,206	494,043	23.6	2,308,288	345,968	15.0
黒人	353,787	193,318	54.6	2,236,201	926,303	41.4
その他	2,633	607	23.1	70,314	10,681	15.2

Women at Work. p.17

表7 職業別分布（1900年）（%）

職業	男性	女性
農業	38.0	15.9
専門職	3.7	8.9
家事サービス	14.9	40.4
商業・交通業	18.5	10.0
製造業	24.9	24.8
合計	100.0	100.0

Women at Work. p.32

表8 女性の多い職業（1900年）（%）

職業	女性労働者の中での割合（A）	女性労働者のしめる割合（B）
<農業>	15.9	8.3
農業労働者	9.4	13.6
農民	6.4	5.4
<専門職>	8.9	34.2
教員	6.8	73.4
<家事サービス>	40.4	36.8
家政婦	3.0	94.7
家内使用人・給仕	24.1	81.9
洗濯婦	6.8	86.8
看護婦	2.2	89.9
<商業・交通業>	10.0	10.4
店員・売子	2.9	24.1
速記者・タイピスト	1.8	76.7
<製造業>	24.8	17.6
繊維工場労働者	4.8	50.0
裁縫師	7.0	99.4
帽子屋	1.7	98.0
お針子	2.9	96.8
合計	100.0	17.7

Women at Work. p.32

表9 家内使用人(人種別) 1900年

分 類	女 性 勞 働 者			
	総 数 (X)	家内使用人および給仕		
		実 数 (Y)	人種分布 (Yの内訳)	この職業の 比重(X/Y)
合 計	4,833,630	1,165,561	100.0%	24.1%
白人 A	1,771,966	305,883	26.2	17.3
白人 B	1,090,744	223,327	19.2	20.5
移 民	840,011	322,062	27.6	38.3
黒 人	1,119,621	313,078	26.9	28.0
そ の 他	10,288	1,211	0.1	11.8

Women at Work. p.41, p.45

表10 家内使用人(地域別人種分布): 1900年 (%)

	白人 A	白人 B	移 民	黒 人	計
全 地 域	26.2	19.2	27.6	27.0	100.0
北 東 部	24.7	17.4	47.5	10.4	100.0
南 東 部	17.1	1.9	2.6	78.4	100.0
北 中 部	34.6	34.3	23.8	7.3	100.0
南 中 部	18.5	3.5	2.6	75.5	100.0
西 部	32.1	27.6	34.8	5.5	100.0

Women at Work. p.42

表11 職業別人種分布(1900年) (%)

	洗濯婦	お針子	裁縫師	帽子屋	工場労働者
白人 A	12.7	43.4	45.2	54.5	32.2
白人 B	8.7	30.2	34.7	34.7	33.5
移 民	13.0	18.1	16.4	10.6	34.1
黒 人	65.4	8.1	3.7	0.2	0.2
そ の 他	0.2	0.2	—	—	—
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

	店員・売子	事務員	速記者	教 員	農 民
白人 A	42.3	50.6	53.3	63.5	58.2
白人 B	45.5	39.6	39.6	27.0	6.1
移 民	11.9	9.1	6.9	5.3	11.4
黒 人	0.3	0.7	0.2	4.1	23.3
そ の 他	—	—	—	0.1	1.0
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

Women at Work. 各所

表12 女性労働者増加率 (1890~1900)

(%)

職 業	全 体	白人 A	白人 B	移 民	黒 人
家内使用人	6.0	3.9	21.4	10.5	19.1
洗濯婦	54.6	116.8	133.4	35.1	43.9
お針子	0	-11.9	7.9	24.9	-2.6
裁縫師	18.0	18.0	16.1	13.1	65.4
帽子屋	40.2	31.8	63.3	26.9	-51.8
工場労働者	18.6	48.1	8.7	7.9	-32.0
店員・売子	156.4	182.6	135.0	161.5	178.4
事務員	33.3	33.4	34.9	25.2	61.0
速記者	305.0	225.1	389.5	339.5	0
教員	33.4	25.3	52.8	25.5	72.6
農民	35.9	29.4	108.5	20.2	45.2

Women at Work. pp.176-7

表13 女性従事者10万人以上の職業 (1920年)

職 業	実 数(人)	女性全体にしめる割合(%) (上位6種)	女性のしめる割合(%)
・農 業			
農 民	253,836		4.0
勞 働 者	792,915	9.3	19.6
・製造・機械			
衣服(工場以外)	235,519		99.9
衣服(工 場 内)	265,643		64.9
繊維	483,413	5.7	55.4
(うち綿工場)	(149,185)		
・運輸・通信			
電 話 交 換 手	178,379		93.8
・商 業			
店 員 (事務)	170,379		41.2
売 子	361,142		30.7
・専 門			
教 員	639,241	7.5	83.9
看 護 婦	143,664		96.3
・家事サービス			
下 宿	114,740		86.0
家 政 婦	204,350		92.3
洗 濯 婦	385,874		97.3
産 婆	137,431		87.7
家 内 使 用 人	1,012,133	11.8	79.6
給 仕	116,921		51.0
・事 務			
帳 簿 係	359,124		48.9
事 務 員	472,163	5.5	31.7
速記・タイプ	564,744	6.6	91.8

U. S. Census. 1920. Vol. 4. 各所

表14 職業別人種分布 (1920年)

(%)

	家内使用人	洗濯婦	裁縫・お針子
白人 A	26.7	13.1	46.8
白人 B	15.6	4.7	25.7
移民	20.6	8.5	15.9
黒人	36.8	73.5	11.4

衣服工場労働者	帽子屋	繊維 (半熟練)	繊維 (一般)
33.4	49.9	38.3	46.9
33.0	34.8	33.3	19.9
30.7	14.4	25.9	20.2
2.9	0.8	0.9	11.2

売子	帳簿係	事務員	速記・タイプ
56.1	54.3	56.4	53.8
32.6	37.3	36.9	40.1
10.6	7.9	6.0	5.7
0.6	0.5	0.7	0.3

電話交換手	教員	農民	農業労働者
60.7	67.0	51.0	28.6
35.0	24.2	8.8	2.8
3.9	4.1	8.3	1.7
0.3	4.6	31.4	66.6

U. S. Census 1920. Vol.4 各所